1860年代のロシア極東における植民都市の初期市街地計画

EARLY CITY PLAN OF COLONIAL CITIES IN 1860'S OF RUSSIAN FAR EAST

佐藤 洋一*

Yoichi SATO

The basic factor of urban formation of colonial cities in Russian Far East was clarified by the comparison among the early city plans of Bragoveshchensk, Khabarovsk and Vladivostok, which were commonly constructed almost the same time, 1860's. By comparing extent of planning area, land condition, street pattern, dimension of street width and block, form and dimension of the land lot and the facilities, besides considering geopolitical background in those days, the completed form of the city was not described in the initial plans and the principal objects to plan were 4 points of the configuration of fundamental facilities such as; 1) extent of urban area, 2) form and dimension of land lots for sale, 3) location of graveyard and church, 4) location of wharf, market and open space for trading. Following this, it was shown that the initial plans could be understood as measures of securing military base and settlement in the frontier region.

Keywords : Russian Far East, colonial city, urban history, central district, street pattern
ロシア極東、植民都市、都市形成史、中心市街地、街路パターン

1. はじめに

本稿は19世紀後半に、ロシア極東地域に建設された帝政ロシアによる3つの植民都市、ブラゴベシチェンスク、ハバロフスク、ウラジオストクにおける1860年前後の初期市街地計画の特質を検討するものである。

1-1. 帝政ロシアの東進¹⁾と極東地域

16世紀より、主にコサック隊を前面に水路を使いつつシベリアを陸続きに東進した帝政ロシアの拠点形成は、領土が確定していないが、先住民の生活空間であった地に侵入し進められた(図1)²⁾。

アムール川(中国名:黒竜江)流域への南下は、1640年代以降に始まり、アムール川上流のシルカ川に面したネルチンスク(1659年創設)、アムール川に面したアルバジン(1651年創設)という拠点が形成されたが、モンゴル人、及び彼らを従属していた中国の激しい抵抗を受けた。1682年に中国軍がアムール川右岸の愛琿に根拠地を建設した後は、流域での軍事活動が活発化する。結局1689年のネルチンスク条約により、ロシアはアムール流域から撤退し、流域北側のスタノボイ山脈の分水嶺が、中露国境と定められた。

その後、約150年にわたり、アムール流域の中露関係は平穏な時期が続くが、1847年にムラヴィヨフ(N.N.Muraviev)が東シベリア総督(general-gubernator Vostochnoi Sibiri)に就任すると、アヘン戦争によるイギリスの中国進出に対抗すべく、アムール流域への再進出に乗り出す。1849年、彼の部下であるネヴェリスコイが、カムチャツカ半島ペトロパブロフスクを根拠地にし、アムール

河口調査を開始した。翌年、河口付近にニコラエフスク(現ニコラエフスク・ナ・アムール)を建設、その後もこの流域でロシア人占領の既成事実が積み重ねられ、ロシア皇帝から清国との一切の交渉権を一任されていたムラヴィヨフは、1858年に清国政府との愛琿条約の調印にこぎつけ、アムール川以北の領土はロシアへ割譲された。つづく1860年の北京条約では、ウスリー川と日本海との間に挟まれた区域(沿海地方)をロシアへ併合することが承認された。

ブラゴベシチェンスク、ハバロフスクは愛琿条約を根拠として、ウラジオストクは北京条約を根拠として19世紀後半から建設が進められた都市である。ほぼ同時期に形成が始まったこれら3都市は、ウラジオストク(Vladivostok)の名称が端的に意味するように、ヨーロッパロシアから見たまさに東の果ての地域に存在しており、また中露間の国際条約によって清国から割譲を受けた領域内にあることも含め、シベリア地域の諸都市とは出自の経緯を異にしている。シベリア・極東の帝政ロシア植民都市の系譜においては、末期に位置するものとして捉えることができる。

1-2. 本稿の目的

本研究はシベリア・極東における帝政ロシア植民都市形成の系譜を明らかにすることを目的としており、1860年代において計画がなされた帝政ロシア末期植民都市の形成上の特質を初期市街地計画の比較を通して論じるものである。

また、本論で対象とする3都市は、この市街地計画以後、ロシア国内での移民政策や周辺国からの流入者の増加に伴い、都市建設が

* 早稲田大学芸術学校 講師・博士(工学)

Lecturer, Art and Architecture School, Waseda Univ., Dr. Eng.

進行し、19世紀末から1910年代までに現在の中心市街地の都市空間形態の原型が形作られている。本稿は、こうした〈建設期〉における都市空間形成の前提となった市街地計画上の計画内容を明らかにしようとするもので、ロシア極東の都市に関する基礎的な研究となることを望むものである。

1-3. 内外の研究状況

①日本国内／国内においてシベリア・極東の帝政ロシアによる都市形成を扱った研究は極めて少ない。19世紀末の帝政ロシアによる植民都市であるハルビン、ダリニー（大連）に関する歴史については、越沢の研究と、中国東北地方の都市と建築を紹介した西澤の著書がある。解放前までの両都市の都市形成を、主に計画的な側面から論じる越沢の二つの研究⁴⁻⁵⁾では、ハルビンに関してはその前半部分で、また大連に関しては最初の部分で帝政ロシアによる計画が扱われている。西澤の研究⁶⁻⁷⁾においても、冒頭において帝政ロシアの極東政策の経緯が紹介されているが、これらの成果の中では、ロシア極東諸都市に関しては断片的にふれられているにすぎない。またウラジオストクの都市形成を対象としたものとしては、原及び筆者らの研究があるのみである。原の研究⁸⁾は、帝政期のウラジオストクの都市史を多角的に論じているが、空間的な事象には関心が向けられていない。一方筆者らによる研究⁹⁻¹⁰⁾は、ウラジオストク中心市街地における2つの地区の空間形成を事例的に論じたものであり、初期の計画は十分に検討されていない。

②ロシア／一方ロシアにおける研究成果のうち、16世紀後半～20世紀初頭のシベリア・極東の諸都市の形成を対象とした近年の研究では、その多くが単一都市を対象としたモノグラフである。その内容は、都市骨格形成の問題から建築物（初期の木造要塞から教会や民間の都市建築まで）まで多岐にわたっている³⁾。

このうち特に注目すべきは Proskuriakova, Kradin, Obertas による研究である。Proskuriakova の研究¹¹⁻¹²⁾では、西シベリアから東シベリアにかけての諸都市の都市骨格形成の特徴を明らかにしているが、極東地域に関してはふれられていない。また Kradin¹³⁻¹⁴⁾、Obertas¹⁵⁻¹⁷⁾の成果にはそれぞれハバロフスク、ウラジオストクの都市・建築に関するモノグラフが含まれるが、両者とも全

体として建築物に関心が向けられ、初期の市街地計画にふれてはいるものの、計画の内容に対する踏み込んだ検討は見られない。

1-4. 研究の方法

1) 市街地計画における内容の検討

①検討内容／本稿では、3都市の初期の市街地計画図、市街地図および文献史料⁴⁾などから市街地計画における内容を検討し、その比較から都市間の共通点、相違点を明らかにする。具体的な検討内容は、①計画範囲と土地条件、②街路パターン、③街路及び街区規格、④土地ロットの分割方法と寸法、⑤施設計画である。

②初期の市街地計画図、市街地図／計画内容の直接の検討材料となるのは表1に掲げた地図Ⅰ～Ⅲである。各図の表記内容は同一でなく、原地形との関連や街路パターン、大規模な都市施設に関する情報は得られるが、街路・街区規格を推定する際には、縮尺の精度が粗い。本論では以上の図面を初期市街地計画を検討する主な対象とするが、寸法の推定及びロット割りについては、その後1900～10年代発行の市街地図（地図Ⅳ～Ⅴ）⁵⁾を補足的に使用する。

2) 植民都市としての特質

対象3都市は、シベリア・極東の帝政ロシア植民都市の系譜の中では、末期に位置するものとして捉えることができる。本論での空間的条件の検討に基づき、3都市の植民都市としての初期計画上の特質を指摘したい。

2. 文献に見られる初期市街地計画前後の状況

市街地図の分析に先立って、文献による情報をもとに、各都市の市街地計画までの状況を整理しておく。

2-1. 計画前までの状況

1) ブラゴベシチェンスク

①拠点の選定・設置／1856年にコサック隊がウスト・ゼイスク (Ust'-Zeisk) という名の根拠地を設営する以前は、中国名・海蘭泡という名の集落が付近にあったとされている。コサック隊の根拠地は、その後市街となる場所よりも4～5ウエルスト（1ウエルスタ＝1.067km）下流に造られていた。1858年にブラゴベシチェンスクと命名され、アムール川とゼーヤ川の合流地点を中心に海軍の手

によって新たな拠点が造られた。

②市街地計画策定前の建物・人口／最も初期の建物は、軍務知事の住居、軍政府の建物、官僚と軍の上官用の住居、コサック隊の本部であり、建設資材などの運搬はコサック兵の義務とされた。1859年の末には、24の官有建物と5つの民間の建物があったが、その1年後には、それぞれ59と24と増加している。1858年の人口は約1,500人で、65年には3,000人を数えている。最初の市街地計画が立案される1862年にはすでに市街地構成の基本形と5本の街路（ポリショイ、ナベレージュナヤ、ゼイスカヤ、アムールスカヤ、レローチュナヤの各通り）が姿を現していた。

2) ハバロフスク

図1 帝政ロシアの東進過程と主要都市の創設年 (Kotkin, Wolff(ed) "Rediscovering Russia in Asia" 1995 に加筆)

①拠点の選定・設置／1858年にアムール川に対してほぼ直角に迫る3つの高台をハバロフカ (Khabarovka)⁶⁾ と命名し、拠点の建設が始まる。この場所を選んだのは、前年にニコラエフスクを出発し、アムール川の遠征を行っていた海軍大尉ディアチェンコ (Ia.V.D'iachenko) であったとされる。

②市街地計画策定前の建物・人口／1859年の記録では、河から望むことができる高台の上に、柵で囲まれた住居の他、国境警備隊の兵舎、礼拝堂、アムール会社の建物などがあった。兵士や移民のために最初に建設された建物の多くは、粘土造の仮設建築であったが、徐々に木造の建物に置き換わっていった。設営から5年後 (1863年) には市街地計画が立てられ、この時点で167の建物が建っており、それらは全て木造であった。1864年の人口は2,100人であった。

3) ウラジオストク

①拠点の選定・設置／ウラジオストクは、ムラヴィヨフが1859年に出した指示に基づき、南に位置していたポシェット湾と同時に哨所が設置されたという経緯をもつ。1860年に哨所の設置が開始されたころ、湾の入江には中国人出稼ぎ漁民の小屋が数戸あり、海參崴 (Khai-shen'-vei 中国名: ハイサンウェイ) と呼ばれていた。

②市街地計画策定前の建物・人口／その後、市街地計画が立てられる1868年までの間に、教会を始め、兵舎、将校用の住居、機械工場、倉庫、食糧貯蔵庫などが建てられた。記録によれば、1868年には、官有建物32、私有建物35、それに20の中国人の房子 (fanza: ファンザ)⁷⁾ があった。1868年の人口は510人で、軍務関係者とその家族が348人、民間人が89人、移民及び退役兵士とその家族が37人、それに36人の中国人であった。また1862年には民間人であるセミョーノフ (Y.L.Semenov) は初めて住居用の20サージェン四方の土地と草刈り場の分譲を受けた⁸⁾。

2-2. 軍政組織および人的側面

市街地計画策定がなされた1860年代においては、3都市とも軍政下にあった。ブラゴベシチェンスクにはアムール州 (Amurskaia Oblast': 1858年に創設) の行政の中心が置かれ、その軍務知事の管轄するところとなった。ハバロフスクとウラジオストクはニコラ

エフスクに本拠のあった沿海州 (Primorskaia oblast') 軍務知事の管轄下にあった。アムール州と沿海州はともにイルクーツクを本拠とする東シベリア総督 (1822年に創設) の管理下におかれていた。のち1884年に東シベリア総督の管轄下からアムール地方総督が新たに創設されて改組し、その本拠地はハバロフスクにおかれた。すなわち、3都市の計画当初の行政組織は、東シベリア総督の軍政の管理下におかれ、その下に各州の軍務知事がいて、各都市には要塞司令官がいるという構成となっていた。

沿海州の管轄下におかれていたハバロフスク、ウラジオストクの最初の市街地計画は、ともに、ロシア海軍の測量技師で、1862年に沿海州の測量士に任命されたルビアンスキー (Mikhail Riubenskii) によって立案された⁹⁾。ブラゴベシチェンスクの計画立案者は現時点では不明である。

2-3. 計画プロセスをめぐる記述

ハバロフスクの計画策定に際しては、ルビアンスキーが1863年春に現地に到着し、土地の測量を行い、計画図の作成を行っている。後に検討するとおり、この計画図には街路敷設のための森林の伐開線の表示のほか、街区形態、街区内のロット割りなどが示されている。そして翌年にはイルクーツクの東シベリア総督コルサコフ (P.K.Korsakov: ムラヴィヨフの後任で、1861年に就任) にあてて、計画図を送付し、検討及び承認を求めている¹⁰⁾。

ウラジオストクの市街地計画にあたっては、計画策定に先立つ1864年7月に沿海州軍務知事が市街地建設の場所の選定を州の測量技師に依頼したが、実施されなかった¹¹⁾。翌年7月にコルサコフから市街地計画基本方針が出されている。そこには、土地の分譲を前提とすること、街路幅員、街区の形状、ロット割りに際しての原則、1ロットのサイズなどが示されている¹²⁾。しかしながら、これもすぐに実行に移されたわけではなく、1866年2月になってルビアンスキーが到着し、翌年計画が策定され、12月にハバロフスク同様に東シベリア総督に対し、沿海州軍務知事が文書にて説明を行っている¹³⁾。この計画は、上述した沿海州軍務知事による基本方針に則ったものとされる¹⁴⁾。

表1 3都市の初期市街地計画図と表記 (左より地図Ⅰ<ブラゴベシチェンスク>、地図Ⅱ<ハバロフスク>、地図Ⅲ<ウラジオストク>)

<p>①名称・作成年 (所蔵): "Plan" Zorogskoi Zemli' 1869 (ブラゴベシチェンスク市役所蔵)</p> <p>②原図の縮尺: 約42,000分の1 (図中1インチ=1ウェルスタ)</p> <p>③図中の表記内容: 市街地計画の範囲と街路骨格パターン。これらの表記の他、後背の河川・森林などの自然地形が等高線を含めて広い範囲で描かれている。また測量地点とその番号もプロットされている。</p>	<p>①名称・作成年 (所蔵): "Plan" Proektiruemogo Goroda" 1864 (Khabarovsk Regional Lore Museum 所蔵)</p> <p>②原図の縮尺: 約3,500分の1</p> <p>③図中の表記内容: 市街地計画の範囲と街路骨格パターン。街区のロット分割線や、各種施設の名称と番号もプロットされている。また、各街区には通し番号が付されている。市街地計画の範囲のみ描かれており、後背地の情報は表記されていない。</p>	<p>①名称・作成年 (所蔵): "Plan" Proektirualnogo Goroda Vladivostok" Primorskoi Oblasti Vostochn Sibiri" 1865 (Museum of Vladivostok Fortress 所蔵)</p> <p>②原図の縮尺: 約22,000分の1 (推定)</p> <p>③図中の表記内容: 市街地計画の範囲と街路骨格パターン。湾の水面部分には水深表示があり、また後背の河川・森林などの自然地形が等高線を含めて描かれている。市街地北側が広い範囲にわたり不自然に白く塗りつぶされているが、これは軍事機密の観点からと考えられ、後年に塗りつぶされたものと思われる。</p>

2-4. まとめ

初期市街地計画前後における各都市の状況を概観したが、以下のような共通点があげられる。すなわち①初期計画に先立って、海軍の部隊が拠点を設定し、主に軍関係の建物が建てられたこと、②人口の多くは軍関係者であったが、民間人もすでに流入していたことである。このことから、各都市において、市街地計画策定にあたっては軍及び民間人がすでに利用を開始していた既存の土地区画との適合を図ることが求められていたと考えることができる。

一方、計画当時の各都市をとりまく軍政の状況は異なっていた。東シベリア総督ムラヴィヨフが愛知条約調印後ブラゴベシチェンスクに帰還した（1858年5月17日）。ウスト-ゼイスクから拠点が移された時期（1858年7月5日）は、彼がブラゴベシチェンスクに帰着して間もないころである¹⁵⁾。ブラゴベシチェンスクは東シベリアからアムール河を使った樺東地域への通信・輸送の中継地点として、あるいは中国との間の対外的な拠点と見なされていた。条約の調印直後の拠点の移転とその計画はムラヴィヨフの意向も直接的に反映されていたものと考えられる。

同時にアムール河口のニコラエフスクも沿海州軍務知事の本拠が

存在し、ロシア樺東のもう一つのセンターとして位置づけられていた。ウラジオストクは、海軍の軍港ではあったが、海軍当局は、ポシエトかオリガへと本拠の移転を度々検討していた。1860年代においてウラジオストク、ハバロフスクはこの2つと比較して一段低い地位にあった¹⁶⁾。

ブラゴベシチェンスクに関しては情報が乏しいが、計画策定に関してはハバロフスク、ウラジオストクともに、最終的には東シベリア総督の承認を経て実施に移されており、ブラゴベシチェンスクに関しても同様の手続きが取られたことが推察される。また、計画方針に関してもウラジオストク以外の都市では不明であるが、後に検討するとおり、ウラジオストクで示された条件はほぼハバロフスクの計画にも当てはまるものであり、同一人物による計画であることも含め、この2都市では市街地計画上の空間的条件を検討する上で類似点が多い。

3. 市街地計画図の分析による初期市街地計画上の空間的条件

前出の地図Ⅰ～Ⅴに基づいて、以下で考察する初期市街地計画上の空間的条件を抽出し、下図2～4を作成した。それぞれの図の表

図2 ブラゴベシチェンスク初期計画推定図

□ブラゴベシチェンスク（図2）

- ①計画範囲／アムール川にゼーヤ川がそそぎ込む河口付近の東西5.6km、南北2.6kmの範囲。
- ②街区パターン／正方形に近い街区を基本としたグリッドパターンの市街地。ブラゴベシチェンスクは地形条件に恵まれ、平坦な地形が広がっていたため、この様に最も容易に正方形の市街が描かれたものと考えられる。アムール川沿岸の崖地では、広場、公園などが配され、市街の中心を沿岸部に計画した事が伺える。
- ③街区及び街区幅／1869年の地図から、寸法を読みとることは難しい。1910年代の地図文2から読みとると、街区幅は、東西方向では、中央部の幅員30サージュン（1サージュン=2.134m）の街区を中心に南方向へ25サージュンの街区2本、そしてアムール川と接する街区は20サージュンである。市街地北側では15サージュン。南北方向の街区は、15ないし20サージュンである。街区寸法は、東西方向ではほぼ100サージュン（=213.6m）を基調としており、部分的に160、140、90のものが見られる。南北方向は南側では120サージュン、北側では100サージュンである。
- ④土地区画の分割方法と規格／1910年代の地図から読みとると、最も一般的な120×100サージュンの街区では、30サージュン×40サージュンのロット8つと20サージュン×60サージュンのロット2つによって構成される。街区サイズが大きくなると、短冊状のロットが数を増し、最も極端なものは10×60サージュンというものも存在する。
- ⑤計画範囲／広場、公園などがアムール川沿岸に配置されている。市街地の中心的機能を沿岸部に計画していた事が伺える。2カ所に教会の表記が見られる。

□ハバロフスク（図3）

- ①計画範囲と土地条件／アムール川左岸の3つの尾根と2
- ②街区パターン／地形の起伏が激しいが、グリッドパターン本の尾根道を軸にして展開しているが、谷部では地形と河結した形になっていない。アムール川沿岸の崖地では平面の表記が見られる。街区には微細な断面構成が想定されて計画されていたようである。
- ③街区及び街区寸法／初期計画図より、寸法を読みとるこの主要道は25サージュン、その他の街区は15サージュン市街地の微細部を除けば、街区短辺は50サージュンである。
- ④土地区画の分割方法と規格／方形街区は短辺に背割り線街区が構成される。1ロットは25平方サージュンで微格り、街区寸法が決められていたというシステムが推測でき、街区毎に番号が振られており、土地の分割が計画の
- ⑤計画範囲／広場、公園などがアムール川沿岸に配されているなどの施設が配置されている。

記内容に関する分析は、図の下に示した。①計画範囲と土地条件、②街路パターン、③街路及び街区規格、④土地区画の分割方法と規格、⑤施設計画、の諸点に関する表記を検討する。

4. 比較

4-1. 共通点

①グリッドパターンによる空間分割システム／共通に見られる最も顕著な点は、街路構成がグリッドパターンによっていることである。これは、土地区画の規格的な分割を可能にするという観点からなされていたものと判断できる。これは各国の植民都市に共通の計画手法であり、18世紀のシベリア都市における市街地計画に、同様の手法が見られる¹⁷⁾。

先に述べた東シベリア総督コルサコフによるウラジオストクの市街地計画に対する基本方針は、土地区画の分割についても言及している¹⁸⁾。しかし、上記の検討からは、むしろ他の二都市における街区—土地区画の形状と寸法がより規格的事であることが明らかであり、こうした分割方法は、3都市共通のものであることがわかる。

②埠頭とオープンスペース／地図Ⅰ～Ⅲの表記から判断すれば、埠

頭付近にオープンスペースを確保している点は3都市共通に見られる点である。最初の市街地計画において、施設計画に対する明確な考え方の有無を現時点で結論付けられないが、埠頭付近のオープンスペースには造形デザインの面で、当初から象徴的な意味合いを付与されていたとは考えにくい。その後の、特に鉄道開通¹⁹⁾までの間における、唯一の人や物資の流入口であり、ここを中心に市場や商店などが集積し、都市化の核となったことが重要な論点である。③地形の整備／原地形が平坦なブラゴベシチェンスクのみならず、起伏が激しいハバロフスク、ウラジオストクにおいても、グリッドパターンを具現化するにあたっては、大規模な土地の造成は行われず、最低限度の地形の整備で済ませていたことが判る。

4-2. 特有の要素

①幅員からみた街路の等級／格子を構成する街路の幅員は、ブラゴベシチェンスクでは、25サーゼンを筆頭として、20、15サーゼンである。ハバロフスクでは、文献に書かれた街路幅員に関する東シベリア総督コルサコフの原則通り²⁰⁾、25、20であり、ウラジオストクでは原則とは異なり、それぞれ、15、10となる。

最大幅員をもつ街路は、ブラゴベシチェンスクでは市街地中央部

図3 ハバロフスク初期計画推定図

図4 ウラジオストク初期計画推定図

つの谷にまたがる3.4km×1.3kmの範囲。

ンを基調としている。格子は川から北東方向に走る3川によって、横断する街路が連続しておらず、格子が完形に変化が現れ、格子が崩れているとともに、公園などしていたことを伺わせ、尾根道は当初から主要街路とし

とが可能である。街路幅員は、3本の尾根道と市街地北。主要道には、両側に植栽の表記がある。街区寸法は、定し、長辺は125、150、175サーゼンのいずれかで

が入り、長辺を5～7等分し、計8～12のロットで1なまでに一定しており、これが一つのモジュールとなる。またこの時点で、すでに街区内のロット割が書き込前提とされていたことが伺われる。

いる。また市街地西部には軍関係の施設、東部には市場

■ウラジオストク（図4）

①計画範囲／シコタ半島付け根を中心とした南北2.4km、東西2.1kmの範囲

②街路パターン／グリッドパターンを基調としているが、中央の低地部分において2カ所斜行する短い街路が見られ、この部分での街区形状が異なる。海岸線に東西に沿うスヴェトランスカヤ通りの地形は、比較的平坦だが、その他の特に南北方向の街路と敷地の境界部では、路面と土地区画の地盤面の不整合が随所で見られる。部分的に盛り土・切り土をして対応したとの記録が残されている。

③街路及び街区寸法／1910年の地図Vより寸法を割り出すと、街路幅員はスィフンスカヤ通り（現ウボレビッチ通り）が約15サーゼン（約32.0m。1サーゼン＝2.136m）、中央部を斜行するカソイベレーウロク、マルケロフスキーベレーウロクが約8サーゼンである以外は、どれもほぼ10サーゼン（約21.4m）。街区は中央部の3街区がややスクエアな形状だが、その他は南北約50サーゼンでほぼ同一。東西方向は南部の6つの街区ではそれぞれ寸法が西側より112、112、96サーゼン、北部では西側より112、112、152～160サーゼンであり、街区により寸法にばらつきがある。

④土地区画の分割方法と規格／方形街区は短辺に背割り線が入り、長辺を4～6等分し、計8～12のロットで1街区が構成される。敷地規模の標準は市街では25サーゼンとの記述があるが、1910年の地図により算出すると、24サーゼン×24サーゼンという敷地寸法が算出された街区が一つある以外は、いずれも24サーゼン×22～23サーゼンであり、ほぼ同一である。

⑤施設計画／文字表記は市街地南端にドッグと思われる施設と埠頭に関する表記がある。市街埠頭、水兵埠頭、中国埠頭などの名称が表示されている。旧市場付近は、オープンスペースとして捉えられていたことが読みとれる。

を東西に走る街路であり、ハバロフスクではアムール川へ垂直に對する3つの台地の尾根部分を走る3本の街路が等しく25サージェンであるが、ウラジオストクの場合、市街埠頭から市街地を南北に横切り、墓地へと通じるスイフンスカヤ通りのみが15サージェンである。ハバロフスクにおけるこの3本の街路は、谷によって分けられる3つの地区の主要街路として計画されていたことがわかる。ウラジオストクでは、最高幅員が15サージェンであり、街路幅員は各都市でかなり異なっている。その原因としては、ウラジオストクの急峻な地形による平坦地の不足、市街地縁辺部における要塞の存在を指摘することができる。他の2都市と比べれば、土地の制約や街路幅員など、その後の都市空間形成において、市街地が比較的高密となるような条件がこの時点で準備されていた面がある。

この他、格子で区切られる街区を更に細分割している街路が見られる。これらはブラゴベシチェンスク、ウラジオストクではペレウロク (pereulok) と呼ばれる。その幅員は、ブラゴベシチェンスクでは10サージェン、ウラジオストクは8サージェンである。ハバロフスクではこのような街路は見られない。

②格子の軸線及び街区形状／ブラゴベシチェンスクは、沿岸部分で格子が変形することを除けば、ほぼ直交の格子が隙間なく広がっている。ハバロフスクでは、2つの谷によって格子が寸断されている部分があるが、直交する座標軸自体は、計画区域全体に行き渡っている。特に中央の台地の尾根道は、沿道の公共的な土地利用まで計画されていることから、ここが最も主要な街路として捉えられていたと考えることができる。ウラジオストクではグリッドパターンを基調としているが、他の2都市がより広い範囲で格子を拡張しているのに対して、地形との関係により、随所で格子が崩されている。しかしあくまでグリッドパターンを敷衍しており、ここからも当初計画では土地区画の分割に重点がおかれたことが理解できる。

ブラゴベシチェンスクの街区形状はやや正方形に近く、他の2都市とは明らかに異なる。なぜこのような違いがあるのかに関しては、証拠となる直接的な資料はないが、次節において、いくつかの推論を立ててみることにする。

③土地区画の分割方法及び寸法／ハバロフスクとウラジオストクの市街地計画においては、基本的に同一のスケール及び形状をもった土地区画を分譲することが念頭におかれていたといえる。ウラジオストク市街地での格子が崩れている一部の場所を除けば、両都市とも1ロットが25サージェン四方という原則があったことがわかる。面積にすると625平方サージェンであるが、ブラゴベシチェンスクのロット面積は、大きいロットで1200平方サージェン、小さいところでも600平方サージェンであり、他の2都市より大きいものとなっている。帝政期における土地分譲のあり方は、一人の（あるいは1世帯の）所有できる土地面積が定められた帝政時代の法律の存在によって規定されていたともいわれるが²¹⁾、現時点においては定かでない。

5. 考察

5-1. 土地区画と面積

この3都市の中心市街地は、初期市街地計画以後、ロシア国内での移民政策や周辺国からの流入者の増加に伴って建物の更新と増加が進み、1910年代までに現在の都市空間形態の基盤が成立してい

る。上で検討した土地区画は、部分的に細分化、集約化が見られるが、建物更新の際の基準となる単位、すなわち敷地として機能していた。

のちに社会主義体制下において土地が公有化されることにより、土地区画のあり方を支えている制度的基盤と社会的意味づけが大きく変わる。すなわち土地の所有境界としての土地区画は意味をなくし、建築および都市計画においては、むしろ物理的な境界である街区が基準単位、すなわち敷地として捉えられるケースが顕著に見られるようになった。現在の形態はソビエト期における改変を受けているが、帝政時代に建設された建築物はこの敷地区画の存在を前提として存在しており、また90年代以降更に土地所有制度が変容していることも考えあわせると、市街地の建築物なども含めた空間形態の変容を通時的に捉える場合には、土地区画を基準とする必要があることが分かる。

次に、敷地面積に関してふれておく。ハバロフスク、ウラジオストクの市街地計画においては、1ロットが25サージェン四方、すなわち625平方サージェンが基本であり、ブラゴベシチェンスクの場合は、全体的にそれを上回る面積をもっていた。

この敷地面積は、土地区画が都市的な建築を建てるために分譲されたものではなく、市街化初期に見られたような「農村」的な市街地の形成のために分譲されたものであることを示していると考えられる²²⁾。

いいかえれば、3都市の初期市街地計画においては、将来出現するであろう都市的な諸活動の場を形成する基本単位として敷地規模が決められていたわけではなく、当時のシベリア以東における都市移民の居住形態を前提として定められたものだと推論される。区画内での土地利用の典型的なものは、写真1～3にもあるように、敷地境界を木製の柵で囲い、木造の母屋と家畜小屋、付属屋と、菜園によって構成される。土地区画の面積は、こうした土地利用を確保するものであったと考えられよう。

5-2. 街路・街区の基本構成

街路・街区の基本構成自体が、都市によってなぜ違うものになったのか、という要因を考えてみたい。

3都市で原則的に用いられたグリッドパターンは、土地を調査したり、分割したりするには便利であり、多くの植民都市で採用されてきた手法である²³⁾。

ブラゴベシチェンスクの街路構成は、極東での帝政ロシアの進出の最初の足がかりとして1850年から建設が始められたアムール河口のニコラエフスク（現：ニコラエフスク・ナ・アムール）の構成と類似している。地形条件から見た川と市街地の関係、正方形に近い街区による構成は酷似している。この両都市にはそれぞれ建設に前後してムラビヨフが訪れており、市街地計画にあたっては彼の考えが直接的に反映された可能性も考え得る²⁴⁾。

一方でハバロフスクとウラジオストクの市街地計画は、コルサコフによる市街地計画の方針が出された後の計画であり、同じ測量技師ルビアンスキーによって市街地計画が立案された。街路・街区構成の差異をもたらした要因として考えられるのは、計画に関わった人的な条件、及び当事者の有していた職能と知識である。これに関連して、若干の知見を補足しておく。

当時の軍の測量職には、「トポグラフ (Topograf)」と「ゼムレ

左から、写真1:1879年のブラゴベシチェンスク（北海道大学付属図書館北方資料室所蔵）、写真2:1880年代のハバロフスク市街地（出典“Khabarovskii Krai” 1996）、写真3:ウラジオストク中心市街地1870年代（出典“Vladivostok” konets XIX – nachalo XX veka” 1992）

メール（Zemlemer）」という異なった職能をもつ2つの職があった²⁵⁾。トポグラフは、自然地形を測量し、地形図をつくるというのがその主な職務内容であり、一方ゼムレメールはそうした測量成果をもとに、土地の分譲およびその価格などを鑑定し、価値を証明するという不動産鑑定の職務内容を含んでいた。市街地計画の立案は、具体的な場面では、この両者、すなわち「トポグラフ」と「ゼムレメール」の職能を組み合わせられてなされるものであろう。上記のルビアンスキーはゼムレメールであったが、当然計画立案の前提にはトポグラフによる測量の成果があったはずである。また、トポグラフが土地分譲以前の街路構成の線を引き、ゼムレメールが事後的に土地区画の分割線を重ね合わせて引く、ということもあったのではないか。この2つの職能の具体的な組み合わせによっても、市街地計画は違った形態となる可能性は十分考えられるのである²⁶⁾。

5-3. 拠点形成の政策的背景と市街地計画の基本方針

以上見てきた中から、1860年前後におけるロシア極東の初期市街地計画において計画上の主眼がおかれたのは、市街地地域の範囲設定、分譲される土地の形態、墓地及び教会の配置、埠頭及び市場・オープンスペースなどの貿易や交易のための基本的な施設の配置、という4点であったといえる。また、ハバロフスク以外では資料的な不足があり、具体的な配置計画がわかるわけではないが、市街地計画の計画主体や計画の経緯から考えると、以上の4点に加えて軍事施設の配置も等しく重要なものであったと見ることができ。つまりこれまでの検証から、この初期段階においては、自律的な機能を包含した都市をそこに計画したわけではなく、端的に言えば軍事拠点と交易拠点を計画したということを導きうる。

帝政ロシアのシベリアへの東進過程を振り返ると、シベリア地域が担うべき内政的な役割は、軍事支配拠点の建設と税の取り立てセンターの確立であったが、同時にこれを恒久的に機能させるために重要であったのは、食糧自給方策の確保という生存のための基本要件であった²⁷⁾。シベリア諸都市は、まず始めに配された2つのセンターを歴史的な核として発展していったが、食糧の移入は多額のコストを要したため、続いて都市周辺において農民の移住を促し、食糧の確保を図ることとなる。

こうした食糧自給方策の確保は、極東での恒久的定着のための重要な要因であったはずであり、上述した土地区画と区画面積の決定には、こうした事情も反映していたものと考えられる。少なくとも初期の段階においては、植民者がある程度は自らの敷地内で自給自足が可能となるような区画寸法を設定していたことも考えられる。だが自給のための食糧確保は、この手法のみでは無論不確実であり、極東においてもシベリアと同様に農民の移住の奨励を政策的に

執りはじめたことが知られる²⁸⁾。市街地区画での面積の確保は、食糧自給のためのあくまでも補完的な手段であったと思われるが、後に見るようにロシア人の極東への移住政策は、アクセスの悪さが主要因となり、少なくとも1880年代半ばまではしっかりと機能しなかった。結果的に補完的な役割を担ったのは、ロシア領内の都市周辺に流入した朝鮮人や中国人の農民であった。

こうしたことから極東の初期市街地計画は、完成されるべき都市の姿を描いたものではなく、本質的にフロンティア地域における短期間での軍事拠点及び定住地の確保の手立ての一つであった。この植民都市は、ヨーロッパロシアと陸続きで続いているとはいえ、非常に遠隔地であり、大々的な建設工事を施すことによる費用対効果は計算しがたかったに違いない。また、国際条約に基づいているとはいえ、もとの清国領に足を踏み入れた帝政ロシアの極東政策の一環として生み出されたものであり、とりあえず恒久的な拠点の確保のための手を打つ必要があったと考えられる。こうした地政学的な文脈からみても、植民都市の建設は不安定な要因を抱える領土において、拠点の確保をアピールするための最も有効な手段であったはずである。こうした現実的な制約により、ここで確認したような空間的条件を基にした計画が生み出されたものと理解される。

謝辞

本研究は、平成13年度大林都市研究振興財団の研究助成により行われました。記して感謝の意を表します。

注釈

- 1) 帝政ロシア東進過程の概略について、文1)～3)を参照。
- 2) 図1は、ロシアの東進過程で築かれていった拠点の開基年を示している。Stephanは「ロシア極東（Dalni Vostok Rossii）」という概念を歴史的に考える際には、一地方から世界の半分の事柄までを参照せざるを得ない、とし、その概念上の伸縮性を指摘している（文1 p.7）。これは西シベリアから東シベリア、カムチャツカ半島、ベーリング海峡を越えたアラスカへ、それに現在の極東地域、そして19世紀末には中国東北地方までへと拡張していった歴史的過程を一連のものとして検討する必要性を示している。
- 3) 例えば“ArkHITEKTURNOE NASLEDSTVO”誌に掲載されたものを例にとると、その内容は、市街地パターンの形成の問題から建築物（初期の木造要塞から教会建築や20世紀初頭の主に商業者による都市建築まで多岐にわたっている。そこでの主な対象都市を開基年順に列挙すると、チュウメニ（Tiumen' : 1586）、ヤクーツク（Iakutsk : 1632）、ネルチンスク（Nerchinsk : 1654）、イルクーツク（Irkutsk : 1661）、ハバロフスク（1858）、ウラジオストク（1860）などとなる。
- 4) ブラゴベシチェンスクに関しては、文18)、ハバロフスクは、文14)、文19-20)、ウラジオストクに関しては文16)と文21-22)を参照。
- 5) 補足的に使用する地図は以下の2点。

■地図IV：ブラゴベシチェンスク

- ①名称・作成年（所蔵）：“Plan” g. Blagoveshensk Amurskoi Oblasti” 推定1910年代（筆者所蔵）
- ②縮尺：8409分の1（図中の1インチが100サージェン）

③図中の表記内容: ロット割りとロット番号、それに街区単位でふられている通し番号がみられるのが特徴。市街地図のなかでもかなり詳しく、街区寸法も概ね算定することが可能である。

■地図V: ウラジオストク

①名称・作成年(所蔵): “Plan” Syshchestvuiushchago i Proektirovannago Raspolozheniia Oblastnogo Goroda Vladivostoka Primorskoj Oblasti” 1910 (Library of Far Eastern Study Society 所蔵)
②縮尺: 10,272 分の 1 (図中の 1 cm が 50 サージェン)

③図中の表記内容: ロット割りとロット番号、それに街区単位でふられている通し番号がみられるのが特徴。市街地図のなかでもかなり詳しく、街区寸法も概ね算定することが可能である。

6) ハバロフスクは、1893 年までは、ハバロフカと呼ばれた。

7) ファンザは中国人の小屋を指す。石造または、草入りのレンガ造り。

8) 彼はウラジオストク最初の民間人居住者であり、後の地主層の一人となる。文 22) 写真 57 及び 61 のキャプション

9) 文 14) p122、文 16) p86、及び文 22) pp.50-51

10) 文 14) p.122

11) 文 22) p27

12) 文 22) p32。

13) 文 22) pp.50-51

14) 文 16) p86

15) 文 18) 本文 3 ページ目。同書にはノンブル無し。

16) 1860 年代におけるウラジオストクは、沿海州南部諸港の一つにすぎず、ボシュットと競合関係にあり、優位性が高かったわけではない。拠点として新たな位置づけを獲得するのは、ニコラエフスクより沿海州軍務知事の本拠が移転する 1872 年以降である。またハバロフスクも 1880 年に沿海州行政の中心が移転した後、1884 年にさらにアムール地方の行政の中心地となり、重要性が高まったが、その時点においても人口は 5,000 人に過ぎなかった。ブラゴベシチェンスク優位の傾向は 19 世紀の間を通じてみられ、1900 年の時点でブラゴベシチェンスクの人口は 50,000 人を数え、この数はハバロフスク、ウラジオストクの人口を足した数よりも多いものであった。文 1) p83 を参照。

17) 文 12) を参照。

18) 「ウラジオストクは(軍専用港でなく一筆者注)一般港となり、太平洋に面する都市とせねばならないことに留意する必要がある。そこで、以下の諸点を命ずる。

i) 土地は購入を望むもの全てに提供されなくてはならないこと、ii) それぞれのロットは 15 から 30 サージェン四方の大きさに 1 つの街区は 8 つのロットから構成されること、iii) 街区は方形をしていること。」文 15) p.5

19) 1897 年ハバロフスクーウラジオストク間鉄道開通。ブラゴベシチェンスクの鉄道開通は 1913 年。

20) 「道路の幅員は最低 20 サージェン必要である。」文 22) p32。

21) ウラジオストク・アルセーニエフ博物館での聞き取り(1999 年 7 月)及び、ハバロフスク歴史資料館でのヒアリング(1999 年 8 月)。双方で同様の内容の情報を得たが、参照すべき文献は未見である。

22) これは同じく帝政ロシアによって計画された 1900 年前後のハルビンの例と比較すれば明瞭になる。ハルビンの旧キタイスカヤ通り(現中央大街)沿道における土地ロットの分割は、基本的には 10 サージェン四方、すなわち 100 平方サージェンが基本とされており、また一部では沿道部分の敷地間口が、9 サージェンであることが確認される。このサイズは、本稿での対象 3 都市におけるいかなるロットよりも小さい。このサイズを定めると同時に建築を促進するような手段もとっており、都市的建築を誘導するという意図が含まれていたと考えられる。

23) もちろん、一口にグリッドパターンといってもそのバリエーションはさまざまであるが、一般に、①土地分割の容易性、②合理的な交通システムの確保、③住民平等の理念の体现、といった理由からもたらされたといわれる。特にグリッドパターンを広く世界に広めたスペインによる植民都市の計画と建設上の諸条件は、「インド法典」によって定められたとされる。(レオナルド・ベネヴォロ(佐野敬彦・林寛治訳)「図説都市の世界史 3 近世」相模書房, 1983 pp.109-158、アーヴィン・Y・ガランタイ(堀池秀人訳)「都市はどのようにつくられてきたか」井上書院, 1983 pp.29-47)。

24) ブラゴベシチェンスク、ニコラエフスクのプランの、特に正方形に近い街区形状は、図像的に見ると、スペインによる中南米の植民都市のパターンとの類縁性を想起させる。

25) 「トポグラフ(Topograf)」と「ゼムレメール(Zemlemer)」については、以下を参照。(出所: “Entsiklopedicheskii slovar” (Reprintnoe vosproizvedenie izd. F.A. Brokgauz-I.A.Efron, 1890 g.) Moscow, Terra, 1990-1994.)

26) 同様の南下政策の中でロシア帝国はハルビンやダルニー(大連)においては優れたアーバンデザインを残しているが、極東の 3 都市においては、少なくとも初期の段階においてそうした手法の活用は見られない。その差異を最も明確に表しているのは、ハルビンや大連の計画においては、市街地計画の段階から建築家が関与していることである。このような計画に携わる具体的な職能の組み合わせの違いには、極東 3 都市との間の初期市街地計画における本質的

な違いが現れているとみることができる。文 4) pp.39-48、文 7) pp.23-30 27) 文 3) 参照

28) 早い時期では 1861 年 3 月に政府は、東部地方への移民に関する法令(通称「ムラヴィヨフ移民法」)を公布したことが知られる。土地供与、徴兵免除、納税免除により移民を奨励し、その後の 10 年間で、5,000 人に及ぶ人々が、西シベリア、ザバイカル、ヴォルガ、そしてウラル地方からブリアムール地方へ移動し、この地方の富裕な農民層の中核を形成した。しかし、ロシア人移民は徐々にしか増加せず、沿海州のウスリー地方に関しては、1860~70 年には 4,444 人の移民が到着したが、つづく 12 年間(1871~82 年)にはわずかに 742 人しか来なかった、という数字が紹介されている。和田春樹「ロシア領極東の朝鮮人」(所収:『社会科学研究』Vol.40-6, 1989) p.238

参考文献

文 1) Stephan, John J. “The Russian Far East: a History”, Stanford University Press, Stanford, 1994

文 2) Kotkin, S., Wolff, D.(ed) “Rediscovering Russia in Asia”, M.E.Sharp, New York, 1996

文 3) ジェームス・フォーシス(森本和男訳)「シベリア先住民の歴史: ロシアの北方アジア植民地」彩流社, 1998

文 4) 越沢明「哈爾濱の都市計画 1898-1945」, 総和社, 1989

文 5) 「大連の都市計画史(1898~1945 年)」, 1984, (所収:『日中経済協会報』134~136 号, 1984)

文 6) 西澤泰彦『『満洲』都市物語 ハルビン・大連・瀋陽・長春』, 河出書房新社, 1996

文 7) 西澤泰彦「図説大連都市物語」, 河出書房新社, 1999

文 8) 原暉之「ウラジオストク物語」三省堂, 1998

文 9) 佐藤洋一・悠見和重・戸沼幸市「旧セミョーノフスキーバザール周辺における街区形態の形成 ウラジオストク中心市街地の都市空間形成に関する研究 その 1」, 1998, (所収:『日本建築学会計画系論文集』No.505, 1998)

文 10) 佐藤洋一・戸沼幸市「スヴェトランスカヤ通り沿道に現存する建築物 ウラジオストク中心市街地の都市空間形成に関する研究その 2」, 1999, (所収:『日本建築学会計画系論文集』No.522, 1999)

文 11) Proskuriakova, T.S. “Planirovochnye kompozitsii gorodov-krepostei sibirii(vtoroi poloviny XVII - 60-e gg. XVIII v.” (所収: “Arkhitekturnoe nasledstvo” No.25(1972))

文 12) Proskuriakova, T.S. “Staroe i Novoe v Gradostroitel'stve Sibiri (vtoraia polovna XVII-XVIII vv.)” (所収: “Arkhitekturnoe nasledstvo” No.31(1978))

文 13) Kradin, N.P. “Pamiatniki Arkhitektury Khabarovska” , Izdatel'stvo Etnos-DV, Khabarovsk, 1996

文 14) Kradin, N.P. “Khabarovska Istoricheskii” , 1998, (所収: “Dal'nii Vostok” 1998 5-6.)

文 15) Riabov, N., Obertas, V., “Istorii zastoroiki Vladivostoka” , Primorskoe knizhoe izdatel'stvo, Vladivostok, 1961

文 16) Obertas, V.A. “Formirovanie planirovochnoi sturuktury Vladivostoka v XIX v” , 1976 (所収: “Arkhitekturnoe nasledstvo” No.25 (1976), pp.85-94)

文 17) Obertas, V.A. “Arkhitektura Starogo Vladivostoka” , 1980, (所収: “Arkhitekturnoe nasledstvo” No.28(1980), pp.107-118)

文 18) “Blagoveshchensk -fotorasskaz” Gosudarstvennoe proizvodstvenno-kommercheskoe izdatel'stvo Zeia, Blagoveshchensk, 199

文 19) “Khabarovskii kraj” , Izdatel'stvo Utro Rossii, Vladivostok, 1996

文 20) “Khabarovsk : geograficheskii atlas” Glavnoe upravlenie geodezii i kartografii, Moskva 1988

文 21) Krushanov, A.I. “Nekotorye voprosy sotsial'no-ekonomicheskoi storii Vladivostoka(1860-1916)” (所収: “Materialy po istorii Vladivostok, Kn. 1-2” Primorskoe knizhoe izdatel'stvo, Vladivostok, 1960)

文 22) Matveev, N.P. “Kratkii istoricheskii ocherk g. Vladivostoka” izdatel'stvo Ussuri, Vladivostok, 1990 (再版)

文 22) “Strii Vladivostok” Utro Rossii, Vladivostok, 1992

(2002 年 9 月 10 日原稿受理, 2003 年 1 月 29 日採用決定)